



アンダマン島民の現在 —スマトラ島沖地震の6年後

いけや かずのぶ
池谷 和信

民博 民族社会研究部

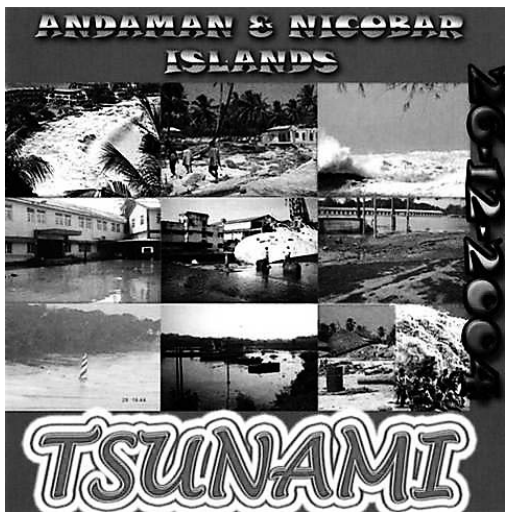
地球上、どこに暮らしていても、他民族・文化の接触はさけられず、国家の干渉からは逃れることはできない。しかし、それらをどの程度、どのように受け入れるか、あるいは拒むかはそれぞれの選択しだいである。インド洋に浮かぶアンダマン島に暮らす狩猟採集民のあいだでも、その現状には違いがあるようだ。

アンダマン島民のその後

インド洋の北東部のアンダマン諸島とニコバル諸島には、多数の島々がある。地理的にはタイ南部のプーケットやミャンマーのヤンゴンに近いが、インド領内に位置する。二〇〇四年二月のスマトラ島沖の大地震で、震源地からわずか一六〇キロメートルというところでもあって津波による甚大な被害を受けた場所でもある。人類学を学んだ人であったら、英国の社会人類学者ラドクリフ・ブラウンの『アンダマン島民』という本を思い出すかもしれない。

わたしは、二〇一一年三月末の一週間、東日本大震災の直後にアンダマン島を訪問する機会があった。「アンダマン島民のその後」に関する資料を収集するためである。これは、震災前に計画していたもので、現地でお世話になった人からは「日本の津波の映像は、(スマトラ島沖地震のときと)まったく同じであったのよ」といわれ、おみやみの言葉をいただいた。

現在、この地域は国防上の理由により外国人の立ち入りを制限しているところが多い。わたしの場合も、州都ポートブレアとその郊外に限定されていて、博物館での展示や収蔵品に関する資料収集が中心になっ



土産物として売られている、津波の映像がおさめられたCD (ポートブレア)

た。州都は、タミール系やベンガル系などインド各地から集まった人びとがおもに居住している活気のある町である。ニコバル諸島からやってきたニコバル農民に会うこともできた。

この地域は、一九世紀から一九四一年まで英国の植民地になっていて、反イギリス的な活動を展開した人びとが大陸から送られる流刑地であった。一九四二年から三年間は、日本によって統治されていた。その後、一九四七年のインドの独立にともないインド領となった。政府は国防上の重要な地域としてみなしており、津波災害の際には、外国からの救援や援助を拒んだ場所である。記録によると、一〇〇年以上には、一〇以上の狩猟採集民が暮らしていたとい

われるが、現在、ジャラワ、センチニールス、オンゲ、グレートアンダマン、そしてショーペンという五つの異なる集団が存在しているにすぎない。なかでもグレートアンダマンは、最近、最後の話者が亡くなったというように、絶滅に瀕する集団になっている。

民族間の現状の違い

今回、現地での滞在をとおしてもっとも驚いた点は、島のなかに現代文明との接触のほとんどない狩猟採集民の人びとが暮らしているという事実である。経済成長の進むインドのなかで、こういう場所があるのが不思議な気がした。しかも、島の海岸部では行政との接触はあるが政府が彼らの生活に干渉せずに丸ごと保護してきたのだ。



車に近づくジャラワの男性

彼らの状況は、政府の政策に強く抵抗してきたことに由来するというのが、その真偽はよくわからない。

ジャラワの人びとは、州都に近い森に暮らし道路沿いで観光客に接することがときにはみられる。しかし、その暮らしはベールに包まれており、津波の際どうであったのかは不明である。オンゲの人びとは、津波時に海岸から内陸に逃げてほとんど死者は出ていないという。海岸の家屋は流されたが、その後、医療援助程度をおこなう行政の避難所に移動したあとに森のなかに自らのキャンプを自力で建設したという。狩猟採集は、常に維持されているわけだ。

ニコバル農民の場合は、そうはいかなかった。ある島では、島の沿岸部に暮らしていたので、すべての村が破壊されて、多数の死者も発生した。しかも、この震災でおよそ三万八千頭の豚が地域全体で死亡したというのだ。わたしの訪問時には、ツナミ・メモリアルパークや高台には新しい村がすでに創られていて、復興計画は順調に進んでいるようにみえた。

狩猟採集民の環境史へ

わたしは、これまで狩猟採集民を中心にすえた地球の環

境史に関心を持ってきたが、彼らは平素から政府に関与してこなかったこともあって、災害への対応に関する情報が文字記録として残されることはほとんどなかった。彼らの先祖は、先史時代にマレー半島からこれらの島に移住して、英国植民地になる以前からこれらの島に暮らしてきた。その一方で、ニコバル農民の方は、今回の地震で大きな被害を受け災害後に住宅が提供されて政府の恩恵を受けることになった。

アンダマン諸島に暮らす狩猟採集民のなかでも、母語が失われつつあり集団の存続が危ぶまれる人びともいれば、狩猟採集を現在においても維持してきた人びとがいる。どうして、このような違いが生まれるのだろうか。災害といった環境変化と彼らのかわりの歴史を、どのように捉えたらよいのだろうか。二〇一二年から始まった民博・共同研究会の場で考えていきたいと思っている。

共同研究
「熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的
研究—アジア・アフリカ・南アメリカ
力の比較から」
代表：池谷和信
2012年10月～2015年3月
http://www.minpaku.ac.jp/research/
activity/project/iurp/121149